
機動戦士ガンダムコピ砂漠第12司令部MS搭乗部隊

天狐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダムコビ砂漠第12司令部MS搭乗部隊

【Nコード】

N8155Y

【作者名】

天狐

【あらすじ】

今は西暦3002年人類はほとんど宇宙に移住した時代、だが宇宙に行けた分食料が足りなくなっ成って行つた。

そして…人類たちは地球軍『地球覇権軍』と宇宙のコロニー（宇宙C・T）に別れて戦争を始めた。

最初はマシンガン、砲台、爆弾などの人が戦地に行き戦つたが…。
地球覇権軍が研究段階のMS^{モビルスーツ}を導入。

MSとは人間が乗り動かす事のできるロボットと行ったところだ、だが普通のロボットとどう違うかと言うと動力が人口的に戦闘用に作り出された細胞と言うところである。

何故細胞が兵器になるかと言うとすごいスピードで細胞が相手の兵器または細胞を破壊していくからだ。

そして、MSを導入した地球覇権軍は圧倒的だった、だが覇権軍がMSを導入した頃ある宇宙のコロニーで

K・Yミノフスキーと言う人物が古い研究書を軍に届けていた。

そこにはミノフスキー物理学と書かれていてなかにはミノフスキー粒子のことが全て書かれていた。

その資料が届けられて一週間後戦場にC・T軍もMSを導入戦場にはもう人はMSに乗っている人間意外居なくなった。

その地球の戦場の一つにコビ砂漠と言う砂漠があった。

そこには地球上で一番食料が生産される工場があった。

まあ当然そんなに大量の食料が生産される場所なのでコビ砂漠には18もの軍事司令部があったがMSがあるのはそのうちの半分だ、そして極秘だがコビ砂漠の北の方にMS生産所もある。その近くにあるのが第12軍事司令部だ今日覚めた彼はここで働いている。

彼の名はシンザイ・R・ベリス16歳で軍に入隊その後ものすごい才能でMS部隊員にまで上りつめた天才だ。

この話はそんな少年の部隊活動を見ていく話である。

? No・zero? あらすじ

今は西暦3002年人類はほとんど宇宙に移住した時代、だが宇宙に行けた分食料が

足りなく成って行つた。

そして…人類たちは地球軍—《地球霸権軍》と宇宙のコロニー（宇宙C・T）に別れて戦争をし始めた。

最初はマシンガン、砲台、爆弾などの人が戦地に行き戦つたが…。
地球霸権軍が研究段階のMS^{モビルスーツ}を導入。

MSとは人間が乗り動かす事のできるロボットと行つたところだ、だが普通のロボットとどう違うかと言うと動力が人口的に戦闘用に作り出された細胞と言うところである。

何故細胞が兵器になるかと言うとすごいスピードで細胞が相手の兵器または細胞を破壊していくからだ。

そして、MSを導入した地球霸権軍は圧倒的だった、だが霸権軍がMSを導入した頃ある宇宙のコロニーで

K・Yミノフスキーと言う人物が古い研究書を軍に届けていた。

そこにはミノフスキー物理学と書かれていてなかにはミノフスキー粒子のことが全て書かれていた。

その資料が届けられて一週間後戦場にC・T軍もMSを導入戦場にはもう人はMSに乗っている人間意外居なくなった。

その地球の戦場の一つにコビ砂漠と言う砂漠があった。

そこには地球上で一番食料が生産される工場があった。

まあ当然そんなに大量の食料が生産される場所なのでコビ砂漠には18もの軍事司令部があったがMSがあるのはそのうちの半分だ、そして極秘だがコビ砂漠の北の方にMS生産所もある。

その近くにあるのが第12軍事司令部だ。今日覚めた彼はここで働いてる。

彼の名はシンザイ・R・ベリス。16歳で軍に入隊。その後もすごい才能でMS部隊員にまで上りつめた天才だ。

この話はそんな少年の部隊活動を見ていく話である。

? No・zero? あらすじ(後書き)

感想やおかしいところなどあれば遠慮無く言ってください！
評価も付けられるほどうまくなっていたらお願いします！。

? No・one? 急襲と対応

ジリリリリリリ

「よし、今は3時30分警備交代まで後30分か…。コーヒーでも飲んで行くか。」

今起きたこの青年はコビ砂漠の食料生産所に最も近い場所にある軍事司令部所属のMS搭乗員だ。

名はシンザイ・R・ベリス現在16歳で軍のMS部隊にまで上りつめた天才である。

今は3時30分、4時00分からベリスが工場の警備の順番だ。

「タグラ隊長ー。交代の時間ですよー。」

ベリスはコーヒーを二杯飲んだあと少し休憩したが暇だったので少し早めに交代をしにきた。

「うん? ああ…そうか。そんな時間か。ベリス准尉後頼んだぞ、後アクライ伍長は?」

「まだ来てませんが、少し早めに来たので。」

「そうか。では後頼んだ。」

そう言つてタグラは眠い目をこすりながら寒い工場の玄関口にある警備室を後にした。

ベリスはまだ来ていないアクライのことを何も無い砂漠を見つめて待ったが交代の4時になつても来ない。

「准尉すいませんー。遅れました。」

やっと来たかと思つたらもうそれは交代の時間から5分もすぎているた。

「伍長何してたの?」

ベリスは今来たアクライに向かって皮肉の声を混せて聞いた。

「寝坊です。申し訳ありません。」

アクライは本当に反省しているのかわからないが、とにかく今は警備と思ってベリスはこれ以上聞くのは押しとどまった。

そしてアクライと話や本を読んでいるうちに次の交代時間まで30分を切った。

横を見るとアクライは爆睡していた、遅れてきた上に爆睡かと苦笑しながらも自分の荷物とアクライの荷物をまとめて交代の準備をした。

その刹那、遠くの砂漠でドカーンという大きな爆発音が聞こえた。

「ッ、敵か。アクライ起きろ敵だ！」

そう言っただけアクライをお越しながらも無線でタグラに敵襲報告を終えたあと工場の真横の地下にある第4格納庫へ向かった。

タグラはベリスからの無線を受け取った後、12番隊員を全員起こして、一番近い第5格納庫へ向かった。

その途中軍事司令部から双眼鏡で工場の方向を見た。

そのとき、ふと警備室に人影が見えたので倍率を上げて見てみるとアクライがもう何がなんだかわからないという様子でオドオドしていた。

ハアと深い溜息を付きながらタグラは目的地の第5格納庫へスピードを上げて向かった。

その頃ベリスは愛機のバゼイドに乗り込んで全てのシステムを起動させたあとだった。

「シアン、出撃準備完了だ。」

それを聞いたオペレーターのシアンは「検討を祈るわ」と言って少し微笑んで見せた。

「出撃準備完了。カタパルトへ移動します。」

機体がクリーンのアームでカタパルトへ移動していく。

「カタパルト接続完了。任務敵機撃墜。進路クリア。発進どうぞ！」

「シンザイ・R・ベリス、バゼイド出ます！」

ベリスは発信のGの衝撃が久々なので体が少しきしむのを感じたが
実際はそれほどではない。

ベリスは発進してまもなく敵機のザドウ2機を見つけた。

その刹那後ろからハイザドウが後ろから切りかかってこようとして
いた。

? No . one ? 急襲と対応（後書き）

機体プロフィール

機体番号：HGMS02

機体名：バゼイド

所属：地球霸権軍

重量：10・6t

全長：16・2m

武装：バルカン砲

セルライフル

120mmマシンガン

セルサーベル

動力：A型セルコア

人物プロフィール

名前：シンザイ・R・ベリス

階級：准将

所属：地球霸権軍

搭乗モビルスーツ：バゼイド

身長：182cm

体重：74K

年齢：16歳

? N o . t w o ? 危険と援護

? N o . t w o ?

「オットオ！そうはいかないぜ。」

そう言つてベリスはバゼイドの腰に装備してあるセルサーベルを抜きながら

ハイサドウのビームサーベルをよける。

しかし敵もバカではないよけられると同時に間合いをとりサーベルが当たらない

ようにした。

するとベリスはセルサーベルを腰に戻しセルサーベルを抜く時に脚部にセルライフルを

取り付けておいたのでセルライフルを脚部から手にとった。

相手はすぐにビームライフルを盾から取り出したが刹那それが爆発した。

「なっ」と相手パイロットの声が聞こえる。

右を見るとバゼイド二型がスナイパーセルライフルを相手のリーダーの届くか届かないかの位置で構えていた。

おそらくそれが相手のライフルに命中したのだろう。

「はっ、まだまだ隊長としての腕は衰えちゃいないぜ。」

その声はまさしく自信と誇りにあふれた12番MS部隊隊長タグラ中尉の声だ。

「さっすが隊長」と言いながら相手がハイサドウと援護に来たサドウがサーベルを引き抜いて

向かってくるのを確認しバルカンで敵の足元を打った。

敵機はジャンプして切りかかって来たがベリスには予想済みだ。

上に向かつてサーベルを突きさした。すると敵機は機体の向きを変えようとしたが

時すでに遅し、そのまま敵機のサドウ一機はサーベルにコクピットを貫かれた。

「うああああああ。」と敵のパイロットの声が聞こえたがその声が終わるか終わらないかに敵機は電子音と共に爆発した。

ベリスは爆発に巻き込まれまいとするが、相手の機体の重量もあつてうまくいように

機体が動かなかつたので敵機の爆発に巻き込まれた。

そのままベリスのバセイドは動かなくなった。

それを見たタグラはマシンガンでサドウのもう一機を撃墜した。その後敵のハイサドウは後退して行った。

「…ううう。」

ベリスは自分のうめき声と共に目を覚ました。

まだ力が入らない体で横を見ようとした。

すると「まだ動かないでくださいよ。」と言う声が飛んできた。

声がした方を見ると医者の子コバ・サリーが紅茶を飲みながら資料をあさっている。

「ああ…俺どうなったんだっけ」

とベリスはそばにあったハンカチで汗をふきながらサリーに聞く。

「貴方の方のこの隊長から聞くとところによると、敵機の爆発に巻き込まれたみたいですね。」

心配しなくても大丈夫です足を打撲した程度の怪我ですから。明日には部隊活動に戻れますよ。」

と微笑みを浮かべてサリーは返答した。

その刹那病室のドアが騒がしく空いた。

「ちよ、まだいいところだったのに。」

「もういいだろ、我慢できん。」

「もう、隊長はー」

とMS部隊の隊長と退院4名ほどが入って来た。

サリーは顔を赤くしていたがすぐに真顔に戻り「からかわないでください」と

隊長たちを叱った。

全く…とベリスは苦笑しながらまだ笑っている隊長たちに顔を向けた。

「それでなんですけど、隊長。」

「ん？なんだ」

タグラはまだにこやかな顔をこちらに向けながら聞き返した。

「相手はミノフスキー粒子を散布していませんでしたよね。」

「ああその件なんだが…」

タグラは一気に真顔になって答えようとした。

? No・two? 危険と援護（後書き）

人物紹介

人物名：イシガイ・P・タグラ

階級：中佐

搭乗機：バゼイド二型、バゼイド

所属：地球覇権軍

身長：170cm

体重：75K

年齢：29歳

機体プロフィール

機体番号：UCKS・M01A

機体名：サドウ

所属：宇宙C・T軍

重量：10.6t

全長：15.3m

武装：バルカン砲

ビームライフル

ビームサーベル

バズーカー

作者の呟き（ゲスト、ベリス氏）

作者「うあ、今日も誤字ばかり…」

ベリス「仕方ないだろ、そういう才能があるんだから」

作者「…ちよつと君後で体育館裏に集合ー」

ベリス「行ってもいいが、仕事忙しいので…【だが断る!】」

作者「よろしい、ならば戦争だ」

二人「自作もよろしくお願いしますー！」

? No・three? 隊長交代!?

「え…? ということですか?」

「いや、だからどこから撮影した画像や動画を本部の研究施設に送っても

理由がわからんのだよ。」

タグラはやれやれと言う顔でタバコを一本吸い始めた。

「だから、この件はしばらく伏せておくことになった。」

「了解です…。他言しないようにします。」

「ああ、頼む。他の奴らが混乱しないためにも。」

＊

その頃同時刻に太平洋沖のハワイ諸島で戦闘が行われていた。

「ちい、まずいなこりゃ。」

「隊長ー! もうもちま…! うわアアアア」

その声が無線に響いた瞬間見方機のパゼイドは爆発した。

「オイ! 味方機、応答しろ! 誰か生き残ってる者は!」

だがいくら無線で聞いても誰からも返事はない。

なぜなら既に覇権軍側は隊長機のパゼイド二型を残して全滅していたからだ。

その後隊長機は戦場を守らんと戦ったが、奮闘もむなしく破壊されてビームの発射音と共に

破壊された。

何故敵がハワイ諸島を狙ったかと言うと、ここには大型の食料貯蔵庫が

二箇所もあるからだ。

それもかなりの戦力でせめて来たらしく防衛基地はあつという間に制圧

されてしまった。

＊

ハワイでのが本部に知れて3時間後に12司令部へ無線が入った。

「12司令部に通達します。ハワイを取り返すべく直ちにチーム編成を検討した結果

シンガイ・P・タグラ中佐は編成チーム3番隊MS部隊副隊長となりましたのでお知らせ

致します。なお中佐が居ない期間12司令部の隊長はシンザイ・R・ベリス准尉を少尉に

昇格させるので隊長をやってもらいます。報告以上です。」

そう言ったところで無線は途切れた。
タグラは早速会議を開いて、このことを知らせた。

「エツ…エエエエエエ」
ベリスは驚きのあまり声が裏返った。

「冗談ですよ…隊長。」
「いや、本当だ。会議してまで俺が嘘つくと思うか？」

「思う。」
全員の意見が一致した。

「まあ頑張れよ。新隊長。それじゃあ、解散！」
ベリスはタグラが面白がっていることを知っていたが、口に出さずにいた。

そしてタグラ出発の日。

「後は任せてください。」
「ああ頼んだぞベリス。」

「隊長！。」
「ん？なんだ？」

タグラとベリスは同時に返事をした。

「あつ、いや…旧隊長の方で。」

アクライは困った顔で言った。

「自分頑張ります。戦力になれるように。」

「ハハハとみんなは笑った。」

「そして、タグラを乗せた、車は本部への長い道のりへ旅立って行った。」

? No . t h r e e ? 隊長交代! ? (後書き)

人物プロフィール

人物名 : アクライ・D・パイス

階級 : 伍長

搭乗機 : バゼイド、バゼイド (援護武装)

所属 : 地球霸権軍

身長 : 1 6 4 c m

体重 : 6 8 K

年齢 : 1 7 歳

機体プロフィール

機体番号 : U C K S - M 0 2 A

機体名 : ハイサドウ

所属 : 宇宙 C ・ T 軍

全長 : 1 4 . 3 m

重量 : 1 3 . 5 t

武装 : マシンガン

ビームライフル

ビームサーベル×2

拡散ビームミサイル

バルカン砲

—— 作者の眩き (ゲスト・タグラ氏)

タグラ「ハッハ。ついに部隊追い出されちゃったよ」

作者「仕方ないよ。そんな感じなんだから」

タグラ「ハア…」

作者「話すことがないww」

タグラ「最後言つとくか・・・」

二人「次作もよろしくお願いしまーす！」

? No・four? 新隊長&部隊

「あゝあ。隊長が俺になったのはいいけど…てかいいいことないけど…どうすりゃいいんだよぉ」

ベリスは隊長になったという責任やプレッシャーだけでも押しつぶされそう

なのに、その後から付いてくる考えなければいけないこと、など沢山あるのだ。

その刹那、司令部がドカーンと揺れた。

「ッ！敵襲か。いや、違うみたいだな放送が入らない…なんなんだ全く」

既にもう爆発しそうな頭を抱えて、総司令室へベリスは向かった。

「なんだ、なんだ！。全く敵でもないのにあの振動は。」

ベリスはここに来るまでも考え事をしていたのでごくイライラしている。

「いえ。本部からの増援が到着したようなのですが…。」

「ああ。タグラ中佐がそんなこと言ってたな。ちよっくら見てくるわ。」

ベリスはちよっくらと言ったが嫌な予感がしたのでダッシュで振動が一番大きかったという

第1格納庫へ向かった。

現在第一格納庫は使われておらず人は一人も居ないはずだ。

途中にすれ違った整備員にどうなっているのかを訪ねたが、わからないと言う返事しか返って来なかった。

そうして向かった先の第一格納庫だったがそこにはベリスも目を疑う真実が待ち構えていた。

「なんじゃ、こりやあああああ」

「…？」

「ちよつと君たち…なにこれ？」

「あつ、僕たち、12司令部の増援に来ました。」

自分とベリスと同年ぐらいの青年が二人と少女が一人今にも爆発しそうな車の横で

汗をかきながらベリスを見つめている。

「それで…。これはなんだい？」

「え…いや…その…アハハ」

「ちよつと、会議室までこれるかい…」

「なるほど、MS部隊員が二人もいるのにトラックの操作の仕方を間違つたと…。」

「本当に、本部から派遣されて来た増援かい？」

ベリスは本当の本気でで疑いの言葉をかけた。

「はい！」

三人とも元気に返事をした。

「そうか…。それじゃあ誰がどの職か聞こうか。」

「最初に一番右から順番に頼みますね。」

「はい。僕はハイベリオ・シラギ。職はMS整備で歳は15です。」

「えつと、ジエクベ・シラギ。職はMS部隊員で歳は16です。」

「私は、カイエバ・イライザ。職はMS部隊員で歳は17です。」

「皆階級は？」

「僕は、軍曹、兄が軍長で、彼女が兵曹長です。」

「歳も階級も順番か。まあよろしく頼む。」

「よろしく願います。」

ベリスはにこやかに笑い、そして三人を部屋へ連れて行つた。

そしてベリスは司令室に戻り、本部に本当に増援かを確認した。本音を言つと違つと言つて欲しかったのだが、そうだと言つ返事が

返って来のだった。

? No . f o u r ? 新隊長&部隊（後書き）

機体プロフィール

機体番号：HGMS-02B

機体名：バゼイド二型

所属：地球霸権軍

全長：16.3

重量：10.0t

武装：バルカン砲

セルライフル

セルサーベル×4

セルバズーカー

マシンガン

動力：B型セルコア

? No・five? 戦場違い

「ハア…これからどうするんだ…。」

「あー。隊長ー」

ベリスが警備室でため息を付いてすぐにアクライが司令部の方から走ってきた。

「どうした、伍長」

ベリスはまだ交代の時間ではないのと思ったが伍長の顔がいつになく焦っていたので

一様聞いてみた。

「大変ですよ。隊長。」

「タグラー」

「ん？タグラ前隊長がどうかしたか」

「今報告が入って…タグラ隊長が宇宙のカイドス5地域の廃墟コロニー内で撃破されて致命傷を負ったって…」

「なんだと…」

ベリスはビックリと言うよりかは自分の耳を疑った。

「ちよつと司令部行ってくる…。交代してくれるか？」

「了解です。」

その返答を受けた瞬間にベリスはもう既に警備室から走り去って行った。

「フウ…これで俺の仕事は終わりっつと。」

アクライは無意識か意図的にか最後の文字を言うまで険しそうな顔をしていたが

言葉を言い終えスッキリしたようで顔がゆるんだ。

司令部に着くやいなやベリスは司令部の東にある通信室に駆け込んだ。

「おつ、おい！タグラ前隊長がやられたって聞いたんだが。」

ベリスは複雑な顔つきで通信班の通信員に聞いた。

「あつ、はい。そのことなんですが……」

聞かれた班員は気まずそうにベリスに答えを返す。

「……それは本当か……？」

ベリスは自分の耳と相手の言うことが信じられないと言う顔でもう一度確認の

ために問うた。

「ええ。ほぼ確定情報かと。」

ベリスは機械の音以外聞こえない通信室の中で顔をしかめていた。

その頃、宇宙C・T軍の月面基地では戦闘が行われていた。

「ウオツ」

「何故ここに覇権軍が」

C・T軍のパイロット達も予想外の襲撃に戸惑っているが、それ以上

に混乱しているのは上層部や作戦司令などの権力者だ。

「どういうことです。偵察兵やスパイの報告ではハワイに攻撃がくるのではなかったのですか。」

女の軍師がすごい剣幕で情報員をどなりつけている。

「はい。そう報告を受けました。」

情報員は何故自分かという顔をして返答する。

「まあ、いいです。今は現状を維持して反撃を狙います。月面基地の全戦力をもつて覇権軍をねじ伏せます！」

「了解しました……！」

宇宙C・T軍のパイロットたちは希望に満ち溢れた声で相手には聞こえないのに返事をした。

「あと、例の者を使うので持ってきてください。フッフ……」

女の軍師は不敵な笑を浮かべながら笑っていた。

? N o . f i v e ? 戦場違い(後書き)

機体プロフィール

機体番号：HGM-S02B

機体名：バゼイド二型

所属：地球霸権軍

重量：10.9t

全長：16.9m

武装：セルライフル

セルサーベル×2

バルカン砲×2

セル二弾銃

バズーカー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8155y/>

機動戦士ガンダムコピ砂漠第12司令部MS搭乗部隊

2011年12月19日13時51分発行